



金史良全集

河出書房新社

II

金史良全集 II

昭和48年1月30日 初版発行

¥ 1200

編 者 金史良全集編集委員会

発行者 中 島 隆 之

発行所 株式会社 河 出 書 房 新 社

東京都千代田区神田小川町3-6

電話 東京(292) 3711 (大代表)

振替口座 東 京 1 0 8 0 2

©1973

0397-414102-0961

印刷・暁印刷 製本・中西製本

乱丁・落丁本はお取り替えいたします

目次

山 の 神 々	月 女	天 使	尹 主 事	Q 伯 爵	光 冥	蟲
89	83	73	67	53	25	5

解題……………	太白山脈……………	ムルオリ島……………	親方コブセ……………	嫁……………	鼻……………	郷愁……………	泥棒……………
金達寿……………							
381	247	217	205	187	161	127	103

金史良全集

Ⅱ

凡 例

一 本巻の本文校訂は安宇植が担当した。
一 本巻に収録した作品中、原作者による改作等の異動がある場合は、いずれもその最終作品を収録した。

一 日本語による作品は原文のまま収録したが、校訂者が若干の改訂を施した。また現在の読者のために、ルビと注を付した。

一 注は原注と思われるものは8ボ、校訂者による短い注は6ボの割注でそれぞれ（ ）内に入れ、長い注は本文中に（一）（二）の番号を付し、各作品末尾に出した。

皇
清

俺といふ人間はどう出来たものか、ひとりきりではひと時も淋しくてをれないやうなはない性分である。どんな相手でも戀しくて戀しくてならない。おまけに困つた程また馴れ馴れしく、二度目にはすぐに相手の肩を敲たたいてふふふと笑ひかけ、若しものことそれが太鼓腹でもあるとすれや、ひどい時にはそいつを指先で突つ付きながらけけら悦に入る。それで一度はこんな調子で、太鼓腹の役人さんをすつかり立腹させてしまった。事實、俺はそもそも大官級から土方諸君に至るまでつき合つてゐる。殊に職業柄その女房達とは一層よく顔をつき合はせる。といふのは、俗に云ふ屑屋なるものが俺の商賣なのだから。いや、屑屋と云ふのはただ俺の生活のてだてに過ぎない。俺は誰にも恥ない誇りをもつた、れつきとした畫學生なのだ。その時も、俺はあの××の玄關で古新聞をはかりにかけてゐた。と、そいつが大人氣もなく轉がり出て來て、おい君、一貫目いくらだねと訊きやがる。それで、へいこれにも公定がありましてなと切り出したら、すぐに彼はぶつくさふくれ上がつて先だつても一貫目一圓四十錢で貰

つて行つた奴があるぞ、お前、あちらのもんだな、あん！それには俺も内心むくれたが、何しろ商賣が商賣なのだ、へい、それは聞かうもんでやしてなと云ふと、おい、××子、廢品回収の時にでも出した方がいいぜといかにもしをらしいことを抜かすのだ。俺は二貫目程のもみくしやになつた古新聞を一々伸ばしては重ね、紐までかけ、腰元からはかりさへ取り出した際なので、ひどく癪にさはつたがやはりもう一度自分を抑へて、へい、どつちにしても同じく國家のためですからな、一つ公定で勘辨して下さいよと云ひながら、ついにその太鼓腹をぽんと叩いたのがいけなかつた。

かういふへまをして取るものも取り敢へずはふはふの態で逃げ出して以來は、俺は一切××さんとのつき合ひをよしてしまつた。つまり出入りをやめたといふことである。俺だつて自分を蔑視する人間を、こちらでも蔑視してやるといふ妙法を持ち合はせてゐる。程遠いところまで逃げて來るなり、俺はさる家の芥箱の上に腰を下ろし、スケッチブックを取り出した。そこでむかむかとした氣持でカリカチュアの筆を練り、その太鼓腹のデッサンに取りかかつた。描いてゐる中に、いつたつたか不本意にも商賣の手前、旦那さん、随分かつぶくのいいお腹でやすなとおべつかを使つたことさへ忌々しく思はれ出した。その時この××さんは何んと云つたものと思ふ。

一層お腹を河豚^{ふぐ}のやうに突き出して、ぢやからわしの部下達はこのお腹をナポレオン腹と云ふとるのぢやよ。へへえ、いい氣になりやがつて、か——ぺつと俺はいきなり晝の中に痰を吐きつけ、たうとうあの記念すべきデッサンを臺なしにしてみました。もつともそれは兎も角として、この内地^本には俺のやうな人間を理解してくれさうな人も少く、またこちらから馴れ馴れしく肩を叩いて話しかけていいやうな人も少い。それで俺は益々孤獨症に取り憑かれるが、この孤獨症は衝動的と云へる程、時たま急に襲つて來るのだ。全くゐても立つてもゐられないやうな絶對的な力でもつて。すると俺もモルヒネ患者がモルヒネを思ひ出した瞬間と同じやうに、俺はたまらない程人間が戀しくなる。その時は仕方なしに、俺は籠を背負つたまま芝浦海岸へとてくてく歩いて行く。

芝浦海岸は移住朝鮮人のメツカ^{サウジアラビアにあるマホメッド聖地として巡礼者がたえない。転じてもあり、またメヂナ^{メッカの北でその方面の人が心を寄せる中心地}方^方にあり、マホメッドの墓がある}ところから、巡礼が雲集するところでもある。苦難と勞役に満ちたところであると同時に、また希望と憧憬にもあふれてゐるところなのだ。各地から入港して來た積荷（主に石炭）を卸す人足達は、殆どが朝鮮出身である。炭粉で黒く汚れた半纏^{はんてん}をまとい、リボンのとれた古中折^{なかめ}などを目深く被つて、彼等は仕事に出掛ける夜中の二三時頃と、仕事から歸る晝の四五時頃になる

と、その附近を蜘蛛の子を散らしたやうにいいそと這ひ廻る。方々の路地や通りには飯場があり、その十疊程のところに平均四五十名づつの人數が、貯炭場の石炭のやうにごろごろしてゐる。仰向けに寢轉んでゐるもの、唄を歌ふもの、罵り合ふもの、げらげら笑ふもの、仕事着をぬぐもの、金を勘定してゐるもの、博奕^{ばくち}を打ち合ふもの。その中彼等の間に何でもないことから何でもない喧嘩がおつぱじまり、わあわあど部屋中が湧き立つのだ。いちがいに云つて、朝鮮人といふものは唄と法螺^{はな}と冗談が好きであると同時に、また喧嘩と罵り合ひも大好きと來てゐる。ところがそのじつは騒ぎの中から、燒酎をあふりに出て行くものもあり、またごそごそ誘ひ合つて洲崎に向ふ連中もある。と思ふと、立派な苦學生達も必ず五六人はゐて、着換へをして神田の夜學へ出掛ける。かうして暫くする中に、部屋の中は再び靜かにをさまり返り、郷里の田植歌や「連絡船は出て行く」などの流行歌のみが賑はふ。それにしても仕事が夜中にはじまるだけに、寢につくのが早く、九時頃にはもう正體なしに寢崩れてしまふ。かういふ生活をする人足が都合六百餘名もあるのだ。

俺は彼等の中にあると、いつも何故かしら自分が豊富になつたやうな、實りゆたかな田圃の中にあるやうなほくほくした氣持になる。つまり俺が孤獨でないのを感じて嬉しい。と

いつて、これらの連中が悉く俺と親しい仲間かといへば、悲しいことに決してさうはいかない。俺みたいな人間に目もくれようとせぬのはまだしも、猫か鼠なんぞのやうな恰好をして肩を漁りにほつつき歩く存在を、朝鮮人全體の顔を汚すものとして睡でもひつかけたい程忌み嫌ひさへしてゐる。彼等は天下の勞働者の中で、自分達こそ日本中で最たる忍耐と體力の必要な仕事をしてゐるぞといふ莫迦げた自負心を持つてゐる。だから籠を背負つてゐる俺など、二度三度見た男だといふので、うつかりそいつの肩でも馴れ馴れしく敲くことには、たちまちに頬打ちを喰はされるのはまだいいところで、ひよつとしたら太平洋の荒潮の中へ鬼も知らぬ間に投げ込まれぬとも限らない。ほんとの話が、彼等はここの海を東京灣とは云はないで太平洋と呼び、吹き荒ぶ風をアメリカ風と名付けてゐる。さう云はれてみると、成程この岸を打つ大波はカリフォルニアの岸を打ち、この岸に吹き寄せる嵐はサンフランシスコにも上陸するには違ひないけれど、兎も角こんなことを見ただけでも、この連中がどんなに大げさだかを知ることが出来る。またどうかしたはずみに、飯場の中に寝てゐる男の足指一つでも踏みつけたひには、彼等の所謂メリケン拳に頭がすつ飛んちやふのが落ちどころであらう。そこで俺などこの連中の中に仰山仲間を拵へ得る譯もなく、また迂闊

にも、馴れ馴れしい大それた眞似などしようとも考へない。

仲間といへば、ただ一人、この界限でちぎみといふ名で通る老人がゐるきりである。俺は淋しくてやり切れなくなると、すぐにこの老人を思ひ出し、思ひ出すとどうしてもその足でこの海岸へやつて來ないではをれない。ちぎみ老人は年も六十を遙かに過ぎたモルヒネ患者で、六尺に近い長身が老齡と中毒でミイラのやうに痩せ細り、それがためにアメリカ風でも激しい時には體がへし折れさうにみえる。それがマラソン選手のやうにいつも兩の拳を胸の上において、さも忙しさうにはつつき廻る。まことにこの人生を永いマラソンの旅と云はうものなら、彼こそはやゴールに近付いてゐるばかりか、へとへとに疲れ果てて今に倒れさうな老選手と云はう。彼は走るがやうに歩き廻りながら、奇妙なことにいつもちぎみちぎみと呟く。それがためにちぎみといふ名で通るやうになつてゐる。彼自身も今は自分の名前が昔からちぎみであつたやうに思つてゐるらしい。といふのは、いつだつたか俺が一體ちぎみつてどういふ意味なんだいと訊いた時、彼はひよつと舌を出しながら、そりやわしの姓名三字ぢやでと笑つたものだ。思ふにちぎみと云ふ言葉は、ぢえみといふ言葉の訛つたもののやうである。彼の故郷である慶尙道では、殊にえ或はいの字が音便でけ、或はきはぎと發音されてゐるらし

いから。ぢえみ、といふ言葉は内地語(日本語)で翻譯すれば、畜生、忌々しいといふ程の意味にならうか。朝鮮在住の内地人(日本人)がよく口に上せるぢえぱり、といふ言葉こそ、それから轉化したものと云へるであらう。兎に角どうして、この老ちぎみは一口毎に畜生、忌々しいと呟き廻るのだらうか。永い永い移住生活の間、何一つ彼にとつてかんばしいことはなかつたのだらうか。さう考へると、一入ひとしほ俺はこの老ちぎみがあはれに思はれて、一層いたはりたくなるのである。

さて親愛なこのちぎみはモルヒネがたまらなく戀しいひと時を除いては、いつも自分の方からも俺を待ち焦がれてゐるもつと正確に云へば、藥が戀しいひと時でも、いやむしろたまらなく戀しいからこそ、俺をまたたまらなく戀しがることもある。藥を買ふためのたつた二三十錢を持ち合はせてゐない時のことである。ちぎみは俺とは違つて六百餘名もある同胞達の間に住みながらも、やはり俺と同じやうに誰一人にもかまはれない野良犬同様、天涯孤獨な存在なのだ。これら人足達は前述のやうに至つて大げさな莫迦げた自負心をもつてゐるので、俺も含めてちぎみのやうなものは、この世上が一度も必要としたことのない唾棄すべき人間だとみなしてゐる。だから同胞にさへ愛されない俺達孤獨な二人が會ふとなると、俺までが身も心も温かい故郷に歸つたやうな浮々した氣持に

なり、またちぎみはちぎみで、その小さなとろけ込んでゐるやうな目をちらりと開ける。と、それは次第にきらきらした光を増すのである。それから一つきりしかない眞黒焦げの前歯をむき出して、ひよつひよつひよつと笑ひ出す。事實齒のないために聲がもれるせぬか、ひよつひよつひよつと笑ひ出す。

一一

ちぎみには定まつた宿もなくまた一定の職業とてない。いつもの日課と云へばこの海岸通りの界限をちぎみちぎみと呟きながらうろつき廻ることである。しかしどこへ行つても足蹴あしにされ、唾を吐き付けられ、時にはひどい奴につかまると喉首をしめられてぢたばたする。飯場の中で物がなくなる場合は、大抵それがちぎみの仕業とされてゐる。だから俺が時々鼠小僧のやうな恰好をして現はれるのも、ちぎみの背後にゐて指圖をし、故買こばい(盗品と知りつつそれを買うこと)をやつてゐるせめだらうと睨まれてゐる。一度は或る飯場で時計がなくなり、丁度その時居合はせた俺達二人ともひどい目に會つたことさへある。が、俺は決してちぎみがそんなふしだらなことをするやうな

人間だとは思はない。むしろこの近處に住んでゐる白い髯^{ひげ}を生やした漢方醫の尹^{ユン}爺^{ニヤ}こそ怪しい。この老醫は嘘八百のごろつきで、しかも大酔つばらひであり、インチキな藥をベラボウな値段で人足達に賣りつける。おまけに文字の書けない人足達の手紙を、拙^{つた}たい文字で代筆して高い手数料までせしめる。それになくなつたといふ物は、大抵この老醫の部屋から再び出て来るが、その時彼はちぎみから買つたのだと云ひふらして罪を逃れる。成程云つてみればモルヒネ患者と云ふのは直ちにこそ泥を聯想させるものだ。しかもちぎみは金を拂つてこの尹爺から麻藥を密かに分けて貰つてもゐる。それで一應嫌疑をかけられるのも無理ないと云へるのに、どうしてかちぎみはまたそれを躍起^{やつき}になつて取消さうともしない。俺の判斷からすれば、ちぎみはそんなことを一笑に附してゐるやうでもあるし、また一面尹爺を怒らしては藥を賣つて貰へないといふ切實な弱身があるからのやうでもある。俺は決してちぎみを疑はない。むしろちぎみのために涙ぐみたくさへなる。

夜になると彼は、人足達が昏々と寢崩れてゐる方々の飯場を訪ねてひよこひよこ覗き込む。そしてほんの少しの隙間でも見付けた時は、蹺音^{あしな}もたてずにこつそりとはひつて行き、ごろりと横になつて俺を手招きする。どんよりとした十燭電

燈一つだけがこの墓場のやうな情景を見守つてゐる。軒^きや呻^うき聲が益々この部屋内の空氣を無氣味なものにする。押入れの襖さへ取りはづされてゐて、その上の段には所謂世話役と云はれる部屋頭が横になつてをり、その下の段には拳骨にものを云はせる劍呑^{けんどん}な男が寢てゐる。ところがちぎみは大それたことに、この擇ばれた者達の押入れの寢床に對して限らない末練をもつてゐた。それは、かういふ飯場の中においてさへ、人目を忍んでこつそりとひと眠りせねばならない自分の哀れな存在に對する内心の叛逆と思はれる。とは云へ彼はどうな意味からであらうと、この芝浦海岸に自分がれつきとした存在意義をもつてゐると考へたく思つてゐる。存在に對するはかない哀愁と云はうか。それで時々晝間、部屋の連中が仕事に出て誰もゐない時を見計らひ、猫のやうにはひつて來て押入れの upper 段に上り、ミイラのやうに仰向けになつていかにも満ち足りた氣持で眠りの天國に入る。俺もいつだつたかちぎみの心配ねえといふ言葉を眞にうけて共に上段下段を占領して寢込んだところを、折り悪しくその日仕事を休んだ劍呑な男に見付かつて、共々腰が折れるまで踏み付けられた。「アイダ、アイダ、手前畜生、老長も知んねえだか、この常奴^{ジョウヌ}あ^{（支配階級の「両班」に對し、庶民階級を「常人」といい、これをさらに卑しんで「常奴」と呼んだ。「奴」には、やつ、野郎の意味がある）}」と、ちぎみは悲鳴の中にも一應いばつてみせる。

寢床の主は今度はいよいよ意地悪くなつてむんづと太い足で老ちぎみの長い首を踏みつけ、ききぎと笑ひながら叫ぶ。

「さあ、敬禮をしろ、敬禮をしろ！」

ちぎみは蟲のやうに蠢めく。

「する、するよ、何度でもするだから」

「早くしろ、早く！」

俺はその隙に乗じてほうほうの態で飛び出したが、出て來て窓の間から覗き込んでみると、ちぎみは息苦しげに悶えながら、ちゃんと手を上げて敬禮をしてゐた。何でもこのちぎみは青年の頃韓國兵丁であつたとかで、道理で格別な趣と威儀のある敬禮をいつもやつてみせるのだ。それでみなは、彼が悪いことをした時はよく敬禮をさせて悦んだ。いづれにせよ、それ以來彼はこの飯場には二度と來なくなつた。かうしてへまを續ける中に、彼の寢場所は次第に少くなつて行つたが、その中いつ頃からのことか、彼は殆んど毎晩を、この界限で普通二階屋と呼び馴らしてゐる朝鮮定食屋の臺所に寢るやうになつてゐた。ここでは夜中の一時頃から起き上り、二階から下の方へ降りて來てぶるぶるふるへながら、水も汲んでやつたり、火もくべたり、よちよち容れ物を運んでやつたりする。

そしてこのやうな一仕事を終へると、今度は、何十年來毎

日缺かさず續けて來た日課第一頁の任務にとりかかる。即ち二時頃になるや否や、彼は例のマラソン選手のやうに、兩手を胸においてちぎみちぎみと呟きながら出て來る。そして喘ぎ喘ぎ方々の飯場を訪ね廻りながら叫ぶ。

「ひよ——いつ、起ぎろ、起ぎろ！」

「時間だ、ひよ——いつ、ひよいつ、起ぎろ！」

誰一人からも起してくれと頼まれたのでもないのに、ただちぎみは自分が彼等に對して、いかに必要缺くべからざる存在であるかを知らさうとするからである。のみならず、自身もそのことを確かに肝に銘じ、しかもそれでもつて自ら慰めようとする。俺もちぎみと共に二階屋食堂の臺所で起き上つた夜中には、彼の命令によつてその後に従ふのである。

さすがに昔の兵丁といふだけあつて、ひよ——いつ、ひよ——いつといふ奇妙な掛聲には、噎がれてゐるにしろどことなく、凜然として威勢のいい響がこもつてゐる。するとこのやうな彼の必死的な號令によつて、あちこちの路地からは半纏をつけた人足達がアメリカ風の吹き荒ぶ宵の海岸通りへとぞろぞろ出て來る。そして銘々食堂を訪ねて方々へ散らばる。と同時に彼の號令と共に路地路地の出口あたりには、明るい提燈やアセチンランプをつけた行商うどん屋だとか、支那そば屋、鯛焼屋、今川焼屋等の車が出張るのだ。それら

の前にも逸早く食事をすました連中が次第に現はれ出て、鴨のやうにたかり騒ぐ。四面八方からは蒸氣船の機關の唸る音が聞えはじめ、闇空をついてあちらこちらから汽笛が鳴り出す。かうしてみると、ちぎみはまるで凡てを支配する豫言者のやうでもあり神のやうでもある。だからこの芝浦海岸を移住朝鮮人のメツカ或はメヂナとすれば、彼をさして經典の中の神と云へるであらう。といふのは、彼こそ永遠孤獨の獨身者で「生まず、生まれず」、また彼のやうなものは三界にただ一人で、「何ものも彼に似たるものなし」であるから。

さうかうする中に、何々組何々組とか看板を出した回漕屋や組合等の横をはひつたいくつもの小路に、黒々と人足達の行列が並ぶ。その先の方は海から入り込んだ入江になつてゐて、傳馬船が何十隻も待機してゐる。それに乗つて彼等は入江を出て、沖の方に碇泊してゐる大きな汽船へ仕事に出掛けるのだ。傳馬船には既に乗り込んだ人足達が火を起して、その廻りにてらてらと顔を輝かせながら或は立ち或は蹲つてゐる。その火が入江一帯に列をなして火光を上げ、暗い陰慘な海岸の光景に一層の不気味さをそへる。遙か遠い沖の方では汽船から上げのいさり火が炬火のやうに燃えてゐる。そこでいよいよ午前三時頃の芝浦海岸は、影と光に満ちて賑やかになる。

「わつしがゐねえと、こいつらは仕事にも行けねえでな」と、ちぎみはいい氣にうそぶきながら、
「ひよ——いつ、起ぎろ！ 起ぎろ！」と、まだまだ出そびれてゐるものがゐはしまいかと、今度は飯場の玄關を叩き廻る。

「うるさいだぞ、このちぎみの阿片中毒奴！」と、誰かが出て來しなに呶鳴り返しでもしたら、彼はひよ——と叫びながら、その場にびたつと氣を着けをして手を上げ敬禮をし、また思ひのままの方向へ逃げるやうに走り出す。

「起ぎろ！ 起ぎろ！ 船が出るぞう！」

このやうに彼は飽くまで自分の任務に對して忠實であるが、傳馬船が發つ頃になると踵を返して方々の小路へはひつて行き、それが人足達を一杯積んで火光と共に火花を飛ばしながら勇ましく出て行く様を、ちつと立つたまま感慨無量げに見送る。それが終ると再びそこを出て來て、今度はまた別の小路へ別の傳馬船を見送りにはひつて行く。傳馬船が悉く彼に見送られて沖の方へ出て行つてからはじめて、彼は所謂二階屋食堂へ戻つて來るが、しかし歸りにはすっかり元氣をなくして、肩をぐつたりと下ろしたまま悲しげにただちぎみちぎみと呟く。愛する息子達を擧げて戰場へ送つた意氣地のない親のやうでもある。いかに自分がこれら人足達のために必要

な存在であるかを示すの途がとたんになくなつたのを、身に沁みて悲しく思ふからであらうか。ちぎみはこれ程自分を大事なものに思ふ念が強く、また自分こそ六百名もいるこの連中の上に豫言者のやうに或は神のやうに君臨しているといふ、至つて身勝手な信念を持つてゐる。だから人足一人の影もない食堂に歸つて来て、部屋の掃除をしたり、食器を洗つたり、水を汲み上げたりする時は、全くふさぎ込んでしまつて、不愛想でしかも悲しげである。ちぎみまでがかういふ有様の時が、俺には一番苦手である。

ところがまた夜がからりと明け放たれると、再び元氣を取戻して二階からよろよろ下りて来る。これからはあき飯場を一つ一つ覗き廻りながら、若しか病氣で仕事を休んでゐるものでもゐたら見舞ひをする番である。どの飯場にも、もとから胸を悪くしてゐる蒼白い男や、足を挫いて呻いてゐる男、腹が痛んででんぐり返つてゐる男、神経痛で俯伏せになつてゐる男、女を買ひ病氣になつて泣いてゐる男などが必ず五六人はある。ちぎみは窓の方からちよこなんと首を突つ込んで、「どこが痛いのだえ、え、どこが？」と質ねる。病人達は悲しげに目を半ば開けて彼の方を見上げる。そしてそれがちぎみだと分ると、いよいよむかついて来て目を怒らし睨み付ける。と、ちぎみは困つて慰めようとしてもするやうに、ひよつ

ひよつひよつと笑ひかけながら、

「お前さん達な、あの尹爺ゴンダの薬を使ふからいけねえんだよ。あいつの薬は山羊の糞で丸めた奴だで……」

「うるせえ、失せろ！」と誰かががばつとはね起きる。ちぎみは魂消たまげて竦み上りながらも叫ぶ。

「ふんとう、ふんとうだで、わつしが拾つて來ただも。……わつしの薬（阿片）をのんだ方がええだ。ちぎ痛みが治るだよ……」

「とつとと、失せろ、失せんか！」と、今度は他の男達までやけになつて一齊に起き上り、手當り次第投げつけようとする。ちぎみはそこでひや——つと悲鳴を上げながら、しつぽが取れさうに逃げる。ところが、或る時悪いことには丁度窓の傍へ長い煙管ヤセを啞くわへてのつそりやつて來た尹爺と、逃げ際にばちんと顔がぶち當つたのだ。老醫は煙管でちぎみの首筋をいやとばかり打ちのめした。ちぎみは飛び上つた。

「老ひぼれのちぎみ野郎、今何とぬかしやがつた」それからびしやりびしやりと續ける。

「わつしあ、何も云はねえんだ、何も云はねえんだよう」と呻きながら、往年の兵丁ゴレンジは衰れにも自分の頭を兩手で抱へて蹲くまる。俺は中にはひり一所懸命この尹爺をなだめ、煙管がちぎみの首筋に當らないやうにかばつた。すると、やつとちぎ